

公益財団法人 檉の芽会 御中

伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	① 作成日	令和6年5月5日	
②法人・団体名	特定非営利活動法人スコップ		
② 所在地	〒343-0806 埼玉県越谷市宮本町3丁目93番地9		
③ 責任者氏名	松永 乃吏子	(役職名等)	代表理事
④ 担当者氏名	松永 乃吏子	(役職名等)	代表理事

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R05-013	⑦助成金額	50万円	⑧申請カテゴリー	C
⑨奨学活動名	【one step】キミと一緒に並んで歩く学習支援教室				
⑩主な実施場所	カラフル（児童福祉事業所） 〒343-0113 埼玉県北葛飾郡松伏町ゆめみ野5丁目9-5				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

活動内容：「デジタルデバイトの解消」を目指し、アウトプットを重視したカリキュラムで学習支援を行う。また、対面支援だけでなく、LINE等を通じて生活状況の把握を行い（日曜日を除く全日、7:30～22:00）、不規則になりがちな生活リズムの安定を図る。

成果：本事業は、不登校かつ引きこもり状態にある児童5名（小学生1名、中学生1名、高校生3名）を対象とした。結果、5名とも定期的に外出できるようになった。また、そのうち2名（高校生2名）は、バイトに就労することができた。高校への進学を決意した児童は、1名（中学生）がいる。児童同士の関係性も構築され、相互で連絡を取り合い、遊びに出かけるなどの交流が継続している。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A x B)	備考・補足
小学生等	12	2.5	30	
中学生等	12	4	48	
高校生等	22	4	88	
大学生等	0	0	0	
学習支援員等	30	4	120	
その他	0	0	0	
合 計			256	

令和 5 年度 伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：【one step】キミと一緒に並んで歩く学習支援教室

法人・団体名：特定非営利活動法人スコップ

作成者 氏名：代表 松永乃吏子

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

【事業目的】低所得・シングル世帯のデジタル・ディバイドを解消する。

【活動拠点】カラフル（児童福祉事業所）：〒343-0113 埼玉県北葛飾郡松伏町ゆめみ野 5 丁目 9 - 5

【対象児童】第 1 ユニット：3 名（小学生 1 名、中学生 1 名、高校生 1 名）、第 2 ・ユニット：5 名（小学生 1 名、中学生 1 名、高校生 1 名）、フォローアップ：継続 5 名

【スタッフ】常勤 2 名、非常勤 3 名（他事業と兼務）

【内容】サポートは、月 2 回開催の①対面教室と②オンライン・サポートの 2 つの方法で行う。

【対面教室】

目的：スタッフやメンバーとの相互交流に基づく、信頼関係構築のための体験型学習に取り組む**場所：**〒343-0041 埼玉県越谷市千間台西 1 丁目 5 - 1 7 埼玉りそな銀行せんげん台支店（りそな YOUTHBASE）**開催頻度：**

第 1 クール（全 6 回）→2023 年 7～9 月、毎月第 2・4 日曜日、10：00～14：00

第 2 クール（全 6 回）→2023 年 10 月～12 月、毎月第 2・4 日曜日、10：00～14：00

フォローアップ：（全 4 回）→2024 年 1 月～3 月、毎月第 2・4 日曜日、10：00～14：00

内容：提示された課題に対し、Google 検索等により情報を収集する。集めた情報をマインドマップで整理し、Word、Excel、PowerPoint でまとめる。少しずつ自身の考えを発表するプレゼンタイムを設定していく。基本的に、個別課題から開始し、グループ課題を導入し、相互コミュニケーションとアクティブラーニングが実施できるよう支援する。

特徴：デジタル・スキルの習得にフォーカスを当てない。知識・情報収集のまとめとアウトプットから、実践を通し、デジタル・スキルが習得できるようにする。

【オンライン・サポート】

目的：健康状態、学習進捗、生活状況など対象児の日常的な変化を細やかに把握し、学習習慣の獲得・強化を図る**場所：**オンライン

対応時間：日曜日を除く、7:30～22:00 くらいまで

内容：日常的なオンラインでのやり取りを通し、生活や学習状況を把握し、学習を継続できるようサポートする。

特徴：教科学習にこだわり過ぎず、学習に取り組むことができている生活環境にあるのか、もし、ないとしたら、どうしたらそのような環境を作ることができるのかという視点を大切に対応する。**2. 実施した奨学活動の詳細**

【支援経過・概要】

対象児童の募集：参加者数は、問い合わせがあった不登校状態にある児童 9 名のうち、経済的困難を抱えている児童 6 名を対象として実施した。活動の広報は、「不登校児の居場所」という表現を使った。理由は、「デジタルディバイド」という言葉自体が伝わりにくいことと、参加者が支援内容に対して拒否感を抱かないよう配慮したためである。結果、開始前より 3 名が参加した。その後、10 月に 1 名、11

月に1名が対象児童として加わり、最終5名となった。

予備期間 (6月) :参加希望があった3名を対象に、本活動に先駆けて実施した。参加者一様に、慣れない環境に強い緊張を感じている様子が見られた。ボードゲームや趣味の話(ゲーム、アニメ)など、リラックスできるような関わりを大切に支援した。

第1クール (7~9月) :本活動で購入予定であったiPadを購入し、対象児童とのLINEを通じた支援を本格的に開始する。また、同時に家族とのやり取りも並行して取り組み始める。昼過ぎに、「起きた」「おは」等の連絡が不安定ではあるが、送られてくるようになる。学習支援教室では、趣味の話を中心に少しずつ打ち解けた関係に変化した。

第2クール (10~12月) :スタッフとのやり取りに自然さが感じられるようになり、児童の表情も明るくなる。しかし、将来や就職・就学の話となると、明らかに不機嫌になる様子がある。自分自身でも不安を感じているが、それを具体的な行動で解決しようというところまでは至らない。少しずつ本人の反応を見ながら、粘り強くタイミングを図り、将来の夢ややりたいことを言語化できるような支援を行う。

フォローアップ (1~3月) :別プロジェクトとして実施している日中の居場所作り事業に、安定的に通所してくるようになる。そのため、学習支援教室への参加希望者がいなくなり、未開催となる。4月以降の進級・進学に向けて、児童に焦りや迷いが感じられるようになる。「4月からは、学校に行く」と話すこともある。外出に対する拒否感やゲーム・スマホの使用時間は、減少し、それ以外の余暇活動の時間が延長した。学習時間は、児童による差が大きく、参加開始時から横ばいが2名、増加傾向が3名である。オンライン支援は、継続している。

【りそな YOUTHBASE・学習支援教室の実施記録】

	予定・開催日時	参加者数	スタッフ数	経過
予備期間	6月11日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:4名	3名	顔合わせ。ボードゲームに取り組み、交流を図る。
	6月25日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:2名	4名	引き続き、対象児童とスタッフの関係構築を図る。ボードゲームなどにも取り組みながら、生活状況や悩みの把握を図る。
第1クール	7月9日(日)10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:5名	5名	児童は、手持ち無沙汰な様子があり、スタッフが仲介することで、小集団としての交流を行うことができる。
	7月23日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:10名	4名	開催時間後半では、打ち解けた様子があるが、前半は、挨拶を交わす程度。スタッフが中心となり、交流を促す。
	8月13日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:6名	3名	LINEでのやり取りを通じて、日々の生活状況をスタッフが把握できるようになり、対面で合うことの緊張感が和らいでいるのを感じられるようになる。次回開催日までの生活スケジュールや課題をスタッフが把握できるようになる。

	8月20日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:4名	3名	楽しみにしていることやイベント予定などを中心に、児童同士の会話が弾む場面も多くなっていく。
	9月10日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 対象外児童:7名	2名	朝10時頃には、全員が起床し、LINEの返信が来るようになる。生活リズムが安定してきている様子がある。
	9月24日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校1名 (保護者:2名) 対象外児童:3名	3名	家族と面談の機会を設定し、児童の生活状況を把握。保護者より、参加後、キレたり、引きこもったりすることが少なくなっているとの話があり、参加の効果を感じるとの話がある。
第二クール	10月8日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校2名 対象外児童:2名	2名	児童が学習教材を持参するようになる。しかし、自分から教材に取り掛かることはない。スタッフが隣に座り、課題に取り組んでいる様子を見守る対応を行う。
	10月22日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校2名 対象外児童:4名	2名	学習教材の持参が継続する。前回同様、スタッフが隣に座り、見守りを行う。「わからない」という箇所を一緒に取り組み、考え方を言語化するのを助ける。
	11月12日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校3名 対象外児童:4名	1名	「家で、一人でやっても、進まないから」と話し、継続して学習に取り組むことができるようになっている。
	11月25日(日) 10:00~14:00	対象児童:0名 対象外児童:3名	2名	インフルエンザのため欠席者が多くなり、対象児童の参加はなかった。
	12月10日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校3名 対象外児童:2名	1名	今後の進路について話しをすると、「専門学校の見学とかに行ってみたい」と話す。今後、一緒に見学に行くこともできることを伝えると、「いいかもしれない」とのこと。
	12月24日(日) 10:00~14:00	小学1名/中学1名 /高校3名 対象外児童:4名	2名	定期的に勉強することができる児童とできない児童で、過ごし方の温度差が感じられるようになる。
	フォローアップ	1月14日(日) 10:00~14:00	学習支援教室には、参加希望者がなく、未実施。	
2月11日(日) 10:00~14:00		対象児童は、平日に開催している居場所作りに連日参加する。		
3月10日(日) 10:00~14:00		対象児童同士の関係が構築され、プライベートでも相互に連絡を取り合い、外出して遊びに出かけるようになる。		
3月24日(日) 10:00~14:00				

【開催の様子】



【周知方法や協力頂いた関係者及び連携】

- ① 越谷こども応援ネットワーク
- ② さいたまフードパントリーネットワーク
- ③ せんげん台子ども食堂

【学習支援員】

不登校児かつ引きこもり傾向の強い対象児童が多かったため、ゲームやアニメの話題に強い支援員が主に対象児童の直接支援に携わった。一方、家族支援に関しては、福祉・医療の専門職資格を持つ支援員が携わり、就職・就学に関する情報を含め、広く相談に応じた。

【購入した機材・物品の写真（表示用シールの添付）】



- ① 2022Apple10.9 インチ iPad イエロー
- ② 2022Apple10.9 インチ iPad シルバー
- ③ 2021iPad-mini グレー
- ④ iPad-mini6 キーボード付きケース
- ⑤ NIMOSO ガラスフィルム
- ⑥ iPhone15 128GB イエロー

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

得られたもの：本活動は、当団体にとって初めての助成事業となる。デジタルデバイスという明確な課題に対する目的を持った活動であったが、当初、計画したようには、カリキュラムを実行することができなかった。その理由として、児童との関係構築は、想定していたより時間がかかり、本人が逃避しようとしている就学・就職の話題を取り上げられるようになるまで5ヶ月以上を要したためである。しかし、社会交流機会の回復、居場所作りという視点では、一定の成果を残すことができたと感じている。不登校かつ引きこもり状態にある児童5名（小学生1名、中学生1名、高校生3名）を対象とした。結果、5名とも定期的に外出できるようになった。また、そのうち2名（高校生2名）

は、バイトに就労することができた。高校への進学を決意した児童は、1名（中学生）がいる。児童同士の関係性も構築され、相互で連絡を取り合い、遊びに出かけるなどの交流が継続している。

反省点：計画の段階で、対象児童との関係構築の時間を6か月程度用意すべきであった。参加者の多くが、参加以前に引きこもり状態にあり、そこからいきなり就学・就職に向けた学習に取り組むことの困難さを、支援者として想定できず、経験不足を感じている。

課題：デジタルディバイトという明確な社会課題は、存在しているにも関わらず、その趣旨が協力者や団体に明確に伝わらなかった。そのため、本活動は、不登校児支援だけの活動と勘違いされることも多く、目標に合致した対象者だけを集めることができなかつたと捉えることもできる。

今後への発展性：現在、当団体の活動は、①子ども食堂、②不登校児に居場所作り、③なんでも相談、の3つを展開している。この3つの活動の対象を整理し、重複しないよう新たなプロジェクトを計画する必要があると感じている。最終的に、対象児童が複数の活動に参加することはあってもいいが、それぞれの活動の対象者をより明確に示すことで、「デジタルディバイトの解消」という目的に合致した児童と出会うことができるようになると思う。実際、本活動で出会った児童は、支援開始時、いずれもデジタルの大量消費者であり、その生活状況が課題を大きくしていた。

本活動を通じて、「デジタルディバイト」という社会課題は、そこにあるにも関わらず、まだ、それが課題として地域の中で、周知されていないという現実を知ることができた。今後、当団体は、2025年以降の開始に向けて、今回の経験を踏まえ、「子どもをデジタル消費者ではなく、使い手に変えるプロジェクト」を創設していきたいと考えている。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

Aくん（高校2年生・男児）は、11月以降から活動に参加した。活動への参加が軌道に乗り始めてからは、みるみるおしゃれになり、「遊ぶ金が欲しいんで」と話しながら、バイトに行くようになった。当初、留年しそうと話していた通信制高校の課題は、「遊びに行きたい」と話しスケジュールより早く終わらせることができた。家族は、小学校以来、不登校が続き、自宅でゲームをしていることが多かったAくんの変化をととても喜んでいる。

Aくんの変化を目の当たりにして、支援に携わっているスタッフは、自分たちの社会的意義を強く感じられることができた。このように、Aくんとスタッフの情緒的交流を見ていると、支援する人とされる人という垣根を越えた対等で相互補完的な関係を実感する。

Aくんは、今年、卒業後の進路を決めるため、専門学校の見学や産業辞典を読んで、将来の自分自身をイメージする努力を始めている。また、当活動で知り合った仲間と共に、ハローワークに行ってみようという相談もしている。